

1 コンセプト

仕切りのない演劇の舞台上で、「ここが壁、ここが庭」などと自由自在に移り変わっていく境界線に、建築空間にはない自由さを感じていた。

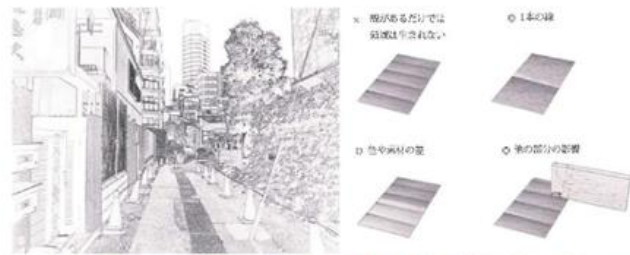
この設計は、舞台と客席を分割する明確な境界線を取り外し、演劇空間と建築空間、どちらもつかない領域の自由さを目指す設計手法の提案である。



舞台における境界線は自由に変わるように見えるが、実際には脚本によって予め定められている。対して建築では、基本がなく行動は自由であるが、壁や床により境界線が固定されてしまっている。

2 観察-日常における境界線

街の中に無数に溢れている、目地・素材・段差の線は、限られた数本に注目したとき初めて、空間の境界線として意識される。よって線を書くのではなく、街並から抽出し減らすことで境界線を生む。



3 敷地-新宿区荒木町

無数の線の重なり合いと地形が特徴的な荒木町から5つの空き地を選び、美術館と劇場を設計する。



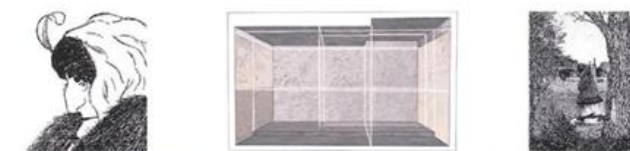
4 場見る-敷地の情報を減らす

舞台上の道具をプロットする「場見る」という操作に着想を得て、設計手法を構想した。



6 だまし絵-空間効果

「場見る」ことにより、街並と建築は一度関係を切れ、再びかすかな関係を結ぶ。そうしてできた天井、床、壁の線同士には錯覚が生まれる。線同士が噛み合わない空間は、騙し絵を見て、どこまでを顔だと認識するかのように、領域の輪郭を体験者の意識に委ねることとなる。



実際に壁を可動させることなく、建築の存在感を薄れさせることもなく、動かぬ建築のなかで人の意識により、自在に境界線が切り替わっていく。



01. 設計手法「場見る」



5つの空き地の周囲に面する風景を立ち上げ、舞台床面に見立てて主要な点をプロットしていく。

02. 「暗転」



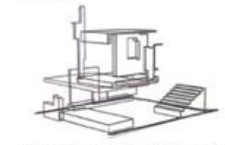
暗転と称し見えている風景を消すと、風景は、点だけの情報に変換される。

03. 輪郭の生成



元の風景を忘れ、寸法を頼りに、点から着想を得て輪郭を結ぶ。

04. 構成



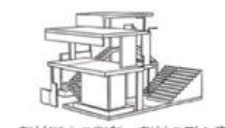
輪郭を延長して作った壁や床などの部分を、各方向から貫き通す。

05. 「明転」



構成が決まったのち、再び風景を現し、街並みで実際に素材が切り替わっている線から、部材上の素材の切り替え線を決めていく。

06. 建築の生成



部材同士の重なり、部材の形と素材の切り替え線の重なりを有する建築が出来上がる。



イメージドローイング ある日の場合

背の高い彫刻作品が階段に置かれたとしたら、2階の窓からも観ることができず

真鍮のフレームによって出た枠の中に彫刻の一部が展示されます



人々は小さな階段を上りながら彫刻を遠巻きに眺めることでしよう

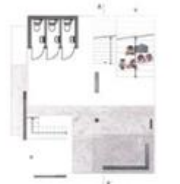
作品の枠だったフレームは、ここでは階段を二分するものとなります



そんなとき階段の手前の基礎でなにか見世物が始まったとしたら、展示台だった大きな階段に腰掛ける人が現れます



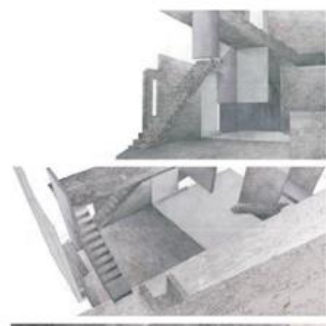
人々は彫刻の側に寄り添うように座りだし、美術作品と人間それぞれの領域が、いつの間にか変化していきます





01. 展示室—深い穴のような敷地 敷地の二方は窓のない隣家の壁でふさがれているため、全面開口とすることによって建築の領域が隣家の壁まで広がる。

展示室
敷地面積：118㎡
建築面積：96㎡
延床面積：133㎡



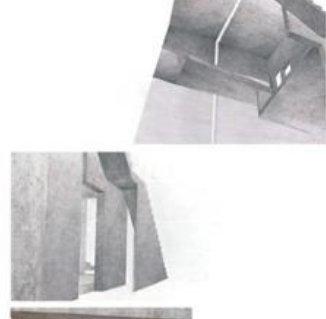
02. 美術館—階段のある敷地 西側のコンクリートブロックの擁壁の線により、建築に入った等間隔の目地は、1本だけが見えたとき空間を2つに分けるものとなる。

美術館
敷地面積：425㎡
建築面積：289㎡
延床面積：434㎡



03. 展示室—擁壁のそびえる敷地 敷地に点が少ない場合、風景に写る形が建築に反映されやすくなる。擁壁の塊が延長されたような建築の内部に、隣家のファサードの点からスロープが作られる。

展示室
敷地面積：86㎡
建築面積：62㎡
延床面積：89㎡



04. 展示室—段差のある敷地 フレーム状の部材は、見る角度により意味が変わる。敷地の東西の大きなレベル差を行き来できるようにする階段は、ブロック塀の点から作られたものである。

展示室
敷地面積：89㎡
建築面積：78㎡
延床面積：139㎡



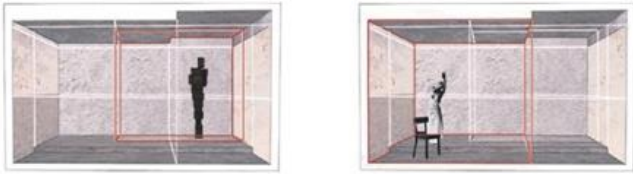
05. 劇場—階段の隙間から広がる敷地 劇場の客席の途中に素材の切り替え線が来ることにより、どこまでが舞台の領域でどこからが客席になるかが曖昧になる。

劇場
敷地面積：499㎡
建築面積：340㎡
延床面積：340㎡



研究旅行計画書

a.卒業制作—空間に置かれる物や空間にいる人は、どこまでをひとつの領域と見るか、どこを境界線と見るか、の手がかりとなります。



b.背景の重要性—マルセル・デュシャンのレディメイドのオブジェクトが、美術館という枠組みに置かれた瞬間作品になったように、作品には背景があってこそ成り立つという側面があります。



Hyang Ho Lee
韓国 フォトグラフィ
ただの自然物である木に背景を変えることによって、美術作品のように見せている。

c.街並みや建築の背景としての役割 人や物が空間に存在するとき、その後ろにあるものはすべて背景となります。したがって、すべての街並み・建築は、人や物の背景としての役割をもっていると言えます。



Sejke 写真作品 建築の外観を背景として写し、人、物、面が平面的なコンポジションを作り出している。

d.芸術と街並みの関係性—作品の持つ力に注目しようと思われているイベントはいくつもあります。ただ、既存のイベントは、大自然や人の多い場所にただ作品が置かれるのみで、作品が見えてくるシーケンスや、作品の背景に対する意識は希薄であると感じていました。作品と街並み、作品と空間の関係性を、シーケンスや背景の問題として捉えることで、街と作品の関係性を捉え直すことはできないでしょうか。



左から 越後妻有大地の芸術祭「花束ける妻科」 直島「南瓜」 新倉クリエイターズフェスタ いげりも草紙堂生

e.研究テーマ “さまざまな作品空間”の研究 背景としての街並み/建築と、作品の関係 研究旅行先 フランス(パリ、ナント、ボルドー)、チェコ(オストラヴァ)

私は、舞台や展示室などの作品空間は、なにかが置かれたときに初めて背景としての意味を持ち始める空間であり、なにも起きていない状態では「意味を付与されることを待っている空間」なのではないかと考えています。ただ、建築を考える際には、意味(機能)を外して空間だけを考えることはできません。当然、作品の置かれる場所を計画する際にも、展示室、観客の動線などそれぞれの空間に名称をつけて考えていくこととなります。この場合、なにもない空間も、「舞台」「展示室」などと名前がついており、純粋な「意味を付与されることを待っている空間」とは言いづらいものとなります。

作品のための建築空間は一義的なものですが、対して、作品のための空間はどこにでも生まれるものです。商店街の中の展示、トラックの上での公演、テントや移動舞台を自ら作っての公演、都市のモニュメント、街中を利用したアートトリエンナーレなど、舞台・美術館と名のつく「建築」があろうとなかろうと、ある場所が作品のための空間になることはできます。

そのような考えから、今回の研究旅行で、私が特に注目したいものは、「異なる機能を持っていた場が、コンバージョンにより展示空間・舞台となった事例」です。通常のコンバージョンは、もともとの空間に宿る意味を新たな意味に書き換えていく作業だと考えています。しかし、ある街が美術展示場へと変貌するとき、また、ある建築が作品の空間へと転用される時、その場所の風景はもともとの意味(機能)とは別に、作品の背景としての役割を担うこととなります。この、街と建築が背景としての役割を担う瞬間は「意味を付与されることを待っている空間」=「ただ空間の形だけがそこにある状態」に、限りなく近づいているのではないかと考えます。

今回私は、ヨーロッパの芸術に対する取り組みが盛んな都市を訪れると共に、まだまだ研究されていない、コンバージョンで生まれた作品空間を訪れ、その内外で起こる、純粋な「背景としての街・建築と作品」の関係性に注目し、街や建築の空間の形そのものの問題に繋がる糧としたいと考えています。

f.研究対象とする街並み 街並みの中のアートのあり方、及び、街と美術館の関係の調査



LE VOYAGE À NANTES
フランス・ナントの夏のアートイベントの様子。廃れた海辺の街が、バスケット球場を美術館に転用したことをきっかけに再興した例。



Parc de la Villette
フランス・パリのラヴィレット公園。有名な事例だが、よく似たモニュメンタルな造形が、様々な背景の元にある様子を観察できる。

g.研究対象とする建築 建築の中のアートのあり方、特に、コンバージョンによって美術館・劇場となった建築物の調査



Piscine Galin
フランス・ボルドーにある市民プール水を抜かれ、オーケストラやダンスなどの劇場空間へと転用されている。



Ostrava tower
チェコ・オストラヴァにある工場の廃墟。現在はアート作品や上演のための空間として使われている。

h.研究の目的—コンバージョンによる作品空間に見る、街並みと芸術の可能性

もともと作品のために計画された、展示室や劇場などの空間は「余計な音が聴こえてはいけなく、明るすぎるとはいけなく、見えない角度があつてはいけなく」と、環境に大きな制約を抱えており、そこから外れた場所は「劣悪な展示空間」などと、クレームの対象になってしまうこともあります。しかし、もともと別の機能であった場所、あるいは街中が展示場になった場合、その場に現れる作品は「日常へのイレギュラーな事件」として捉えられ、そのとき初めて、作品と観客の関係性に、同じ場を共有したという一体感が生まれるのではないかと考えます。

私は、従来の展示空間からは外れた作品の居場所を考えていくことが、「芸術作品は閉じた場所にある守られたものである」という先入観を崩すことになると考えています。そして、ただ作品を無責任に外に放り出すのではなく、背景としての面と、空間内、あるいは街中のシーケンスの問題として捉えることによって、文化を街並みに表出させていくあり方を考えることに繋がると感じています。